

試し読み版

挿絵：桐島サトシ 原作：まくらカバソフト  
酒井仁



魔剣士

シネ2

第2巻

乙女穢されし戦場

第5話

魔導女王、墮つ

008

第6話

カーラ女王、無残

058

第7話

穢れども剣は折れず

122

第8話

聖巫女と淫乱イベント

168

第9話

聖王は高らかに勝ち誇る

213

番外編

聖王の余興と女王たちの日常

256



魔劍士

# シネ2

乙女穢されし戦場

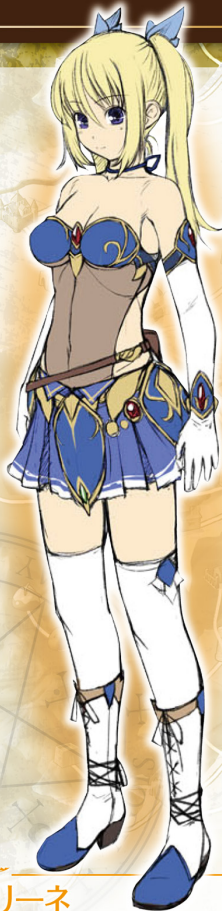
第2巻

魔剣士

# リネ2

乙女穢されし戦場

## 人物紹介



### リーネ

騎士の国ストームランス公国の君主。亡き父の後を継ぎ、まだ少女の身でありながら祖国の復活のため奮闘する。



### アレス

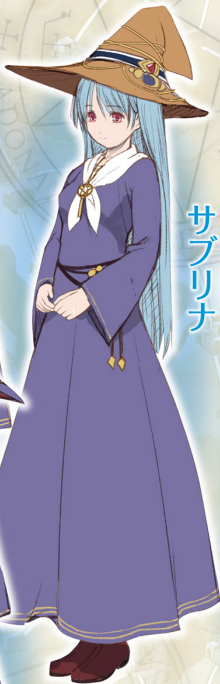
物語の主人公。ハイランド王国軍随一の知将として名を馳せる。腐敗する王国の現状を憂いている。



ドロシー



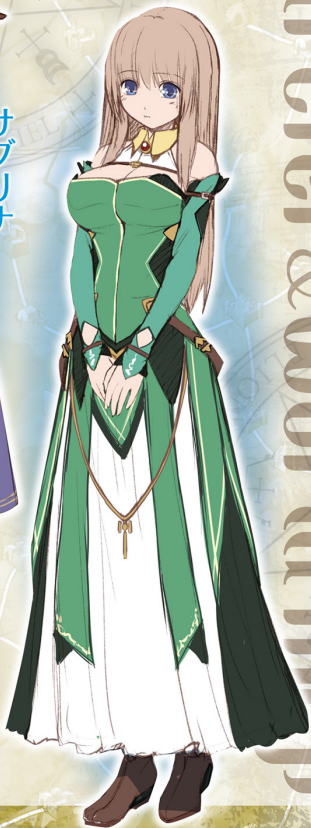
ウエンディ



サブリーナ

## ベアトリス

魔導国家ヘスティア公国を統べる女王。絶大なる魔法力の持ち主



ヘスティア女王ベアトリスに仕える魔法使い三人衆。  
のんびり屋で子供っぽい性格のドロシー。穏やかで大人っぽいサブリーナ。せっかちで怒りっぽいウエンディ。

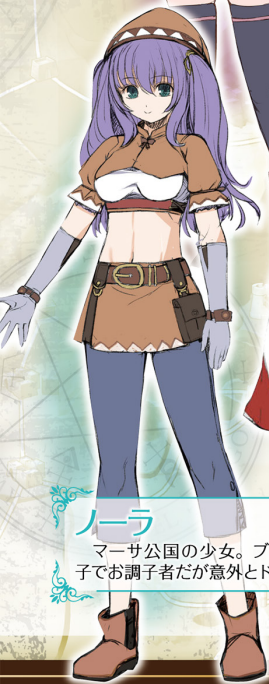
マリオン  
アウラ神国の天才技師。シン  
シアとは幼馴染で親友。

マリオン



シンシア

宗教国家アウラ神国の女王。アウラの巫女としてアウラ信教の頂点に立つ。



ノーラ

マーサ公国の少女。ブリッ  
子でお調子者だが意外とドジ。



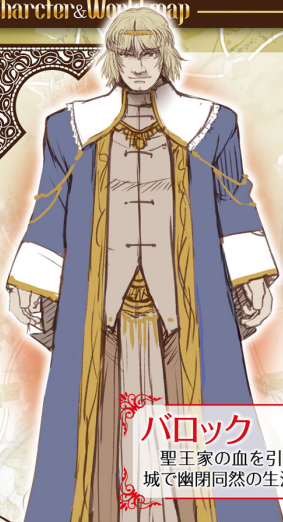
ミュリエル

主人公アレスの妹。修道院で  
習った神聖魔法を得意とする。

セリア

南国の島国で一人静かに暮ら  
す狩人。狩りの腕は超一流。





砂漠の国トリスタン公国の王女。一国の姫君ながら曲刀の腕は超一流。

カーラ



バロック

聖王家の血を引く貴族。地方の城で幽閉同然の生活を送っている。



World map

## 第5話 魔導女王、墮つ

どうしてこんなことになったのか。

彼にはまるで理解できなかった。だがいま目の前で、大切な娘たちが複数の男たちに辱められているのは、まぎれもない現実だった。

「おらおら、もう一発中に出すぞ！」

「いやあ……もう、やめて……」

男たちは剣で武装しており、ただの中産階級の商人である彼に、抵抗する術はなかった。使用人は剣で脅されて逃げ出し、彼自身抵抗する間もなく殴り倒され、胸元は嘔き出した鼻血で真っ赤だ。

「もっと舌を使うんだよ、おらあ！」

十八になる下の娘の口に、赤黒い肉棒が突っ込まれ、激しく出し入れされている。床に押し倒され、男にのしかかられている姉は二十二で、今年結婚を控えている。

「お、お願いだやめてくれ……あんたら、義勇軍じゃないのか」



「ああそうさ、俺たちやあのグスタフ王をぶっ倒した正義の義勇軍だ」

涙ながらに訴える父親をせせら笑うと、男の腰がぶるぶると震える。

「おう、おうっ……これだけ犯りまくりゃ生娘でもずいぶん具合が良くなってきたな」

「ううっ、ダニエル、ダニエル……」

婚約者の名を口にする姉の顔は、涙でぐしゃぐしゃ、しかし無法な男たちにとってそれは、いつそう興奮を煽る材料でしかない。

グスタフ王の暴虐に対し、聖王を擁した義勇軍が首都ダイヤモンドシティに攻め上がったことは彼も知っていた。

（アレス將軍の命令で、略奪行為など一切行われていなかった、なのにどうしていまさら庶民に高い税を課すグスタフ王の評判は、確かに良くなかった。もし本当に聖王が復活したのなら、もう少しよい治世をしてくれるのではないか、そんな期待もあったのだ。それなのに。

（これでは山賊と同じじゃないか）

目の前の悪夢が早く終わって欲しいと願う彼の期待も空しく、見張りをしていた別の兵士が顔を覗かせる。

「おい、早く交代しろよ！俺たちや脱走兵なんだぜ」

「へへ、わかってるさ。おら、ちゃんと飲むんだぜえ〜っ」

「んぐううう〜〜っ」

妹の頬を掴んだ男が、陰茎を根元まで突き入れ、娘の喉に汚液を注ぎ込んでいく。げぼげぼと咳き込む少女の顔に、男は無情にも体液まみれ唾液まみれの肉棒を擦りつける。

「やっとなの番か。俺は後ろからが好きなんだ。おら、ケツを上げろッ」

少女の尻を蹴りあげる兵士に、少女は泣きじゃくりながら従う。幾度となく陵辱され、赤く染まった尻肉を乱暴に掴むと、男はそそり立った凶器をずぶりと乙女の花弁にねじり込む。

「いぎいぎ……っ」

犬のような格好で犯される妹を、姉はもはや放心の表情で見つめている。股間からは大量に注がれた白濁が噴きこぼれ、そこにもう一人別の見張り役が近づいて、陰茎を取り出す。

「ひひひ、入れるぞいれるぞ……」

諦めきった顔で肉棒が入れられるさまを見つめていた姉の目に、きらめく光が飛び込ん

だ。  
「エッジ……ラッシュュツツッ！」

稲妻のような剣光に襲われ、男がぎゃあと叫んで顔と股間を押さえる。

突然の乱入者が剣を持った少女だと知ると、男たちはたちまち色めき立ち、股間丸出しのまま剣に手を伸ばす。

「やあっ、はああっっ！」

しかし、少女の動きは素早かった。

黄金のツインテールを揺らし、右に左に男たちを牽制しつつ、流れるような動きでたちまち圧倒する。

「な、なんだこの小娘ッ、強エッ」

「あんたらみたいな雑魚に、聖剣技を使うまでもないわ。まだやる気？」

「あんたまさか、リ、リーネ女王！」

少女の正体に気付いた元義勇兵たちが震えあがる。ストームランス公国の女王にして無双の剣の使い手。その強さはあの將軍アレスにも匹敵するという。

「一般市民への略奪行為は厳罰ってこと、知らないはずはないわよね！」

リーネの剣幕に押されつつ、男たちは卑屈な笑みを浮かべる。

「けっ、何が義勇軍だ！ グスタフ王も、聖王までおっ死んじまったら、この国ももうおしまいさ！」

「ク……………」

聖王ルートヴィッヒが暗殺者の手にかかって命を落とす、まだ五日と経っていない。なのに既に末端の兵にまでその噂が広がっている……：リーネは悔しそうに唇を噛んだ。

「俺たちや気楽な海賊か野盗にでも戻らせてもらうぜ、じゃあな！」

敵わぬと見てか、脱走兵たちは逃げ出していく。リーネは同行していたストームランス公国の兵士に後を託すが、負傷した商人と二人の娘たちは放心状態のままだった。

「リーネさま、バロックさまより直ちに戻るように」と

「ええ、わかってるわ」

聖陵ホーリーヒルでルートヴィッヒが殺され、そのうえヒツピア軍襲来の報にバロックは浮足立った。

リーネたちを護衛にダイヤモンドシティに戻ると言いだして聞かないバロックに、アレスはわずかな手勢と共にノースブリッジの砦でヒツピア軍を迎え撃つことにしたのだ。

（無事でいて、アレス……！）

ノースブリッジは攻めるに難い要塞ではあるが、籠城が長引けばアレスたちが不利になるのは明白だ。先ほどの脱走兵を見てもわかるように、義勇軍内部にも不穏な空気が漂っている。

(ストームランス公国やヘスティア公国、アウラ神国はともかく、諸侯たちはルートヴィッヒさまを喪ったショックから立ち直れていない……どうすれば)

せめてアレスたちの下に援軍を送るよう、バロックに進言してみよう。そう思うリーネを出迎えたのは、喜色満面の諸侯たちだった。

「リーネ女王、喜ばしい知らせですぞ」

「ど、どうしたというのですか」

三大国以外の領主諸侯たちは、ルートヴィッヒの檄文によって蜂起した者たち。聖王亡き後の意気消沈ぶりからは想像できない喜びようだ。

「バロックさまが！ バロックさまに聖王の御徴みしるしが現れたのです!!」

「これでハイランドは救われた！」

「聖王バロックさま万歳!!」

そんなバカな……と大急ぎで駐屯地に戻ったリーネは、聖王万歳の声に沸き上がる諸侯や兵士たち、その中心でこれ見よがしに輝く聖王の証を見せつけるバロックの姿を見た。

「リーネさま」

「ベアトリス、シンシア！ これはいったいどういうことなの!!」

「おお、リーネよ戻ったか。まったくお前というやつは、ワシの護衛という大任を放り出

して脱走兵の討伐など……だが、この聖王の証に免じて許そう」

金髪的美剣士の姿を認めるや、肥満気味の男はぐいとリーネの肩を抱き寄せ、兵士たちに手を振って応える。

（さっきのは確かに聖王の証。まさか本当に？）

ルートヴィッヒの死を忘却の彼方に追いやったように、一行は新たな聖王バロックと王城に向かおうとする。

それよりノースブリッジに援軍を、と言いかけるリーネを押しとどめたのは、ベアトリースとシンシアだった。

「リーネさま、いまはみな聞く耳をもたないでしょう。それにバロックさまの側近の方が『早急に聖王の後宮を作るべき』と言いだして」

アウラ神国の巫女女王の口から出た単語に、リーネは呆気に取られる。

「こ、後宮？」

後宮とは王妃や側室を幾人も囲い、王の世継ぎを産ませるための施設だ。だが今はヒツピア帝国が国境まで攻め込んでいる事態だというのに……。

「けれど、ルートヴィッヒさまのことを思えば、皆さまのお気持ちも理解できます。もしバロックさまの御身にもしものことがあれば、今度こそ」

「ベアトリス……でもこうしている間にもアレスたちが」

「ええ。シンシアさまと共に、援軍の要請をバロックさまに進言しておきました。リーネさまはできるだけ精鋭を選出してくださいませんか」

「そ、そうすればきつとアレスさんのお力になれると思うんです！」

菌がゆいが、今はそれが最善策だろう。ベアトリスもシンシアも、前線に残してきたアレスや自国の兵たちが心配なのは同じなのだ。リーネにもそれはわかっていた。

2

「あれは……？」

近頃、ハイランド王城内はにわかに騒がしい。新たな聖王となったバロックのために、後宮が急ピッチで建設されているのだ。

バロックの実妹である女騎士クロエは、建設の指揮を取っている男に目をやって、少し眉をひそめる。

（彼は長年の兄君さまの側近……けれど最近雰囲気が変わったような）

後宮作りを諸侯に積極的に働きかけたのも彼だった。以前はずっと控え目な人柄だったはずだが……と訝いぶかつていると、テラスで物憂げたがずに佇むリーネとベアトリスの姿があった。

(けどあたしは、ア、アレス……あたしどうすればいいの……?)

ベアトリスがそういう選択をしたというのなら、それを責める権利はリーネにはない。むしろ彼女は民のため、平和のためにバロックの子を孕むと決意したのだろう。

思い惑う間もベアトリスはリーネの尻を撫でさすりながら、下肢の付け根に舌を這いまわらせる。舌先が敏感な肉芽に触れた瞬間、リーネは「あっ」と声を漏らして身体を震わせた。

「おっと、ベアトリスの舌遣いはなかなかのものだろう、ククク」

よろめきかけたリーネの身体を支えるように、バロックは両手で乳房を揉み上げてくる。むき出しの背中に男の広い胸が押しつけられると、その鼓動まで伝わってくるようだ。

(「こんな、に……広くて逞しかったかしら……そ、それにお尻に当たってる、あ、あれが」  
尻の割れ目には勃起した男根がぐいぐいと擦りつけられている。

バロックがその気になれば、少し腰を引くだけで長大な肉棒の先端は容易くリーネの処女穴に達してしまうだろう。

(駄目よ、それだけはダメ！ あたしは剣の国、ストームランス公国の女王。剣を持って国を、民を守るのがあたしの使命……!)

「リーネさま……おまんこの奥から芳しい処女の蜜が溢れてきておりますわよ。リーネさ



まも私のように、バロックさまの子種を欲しておられるのではないのですか」

そんなことない、と言いかけて唇を噛みしめる。下腹の奥から熱いものが「じゅわり」と分泌されるのがはつきりわかったからだ。

「ち……ちが……」

「そう言っただけでやるな、ベアトリス。リーネはまだ清純な乙女。聖なる勤めとはいえ、純潔を捧げるには覚悟もいるだろう」

そう言いつつも、バロックの手はリーネの乳房を揉むのを止めようとしめない。熱い吐息を耳の後ろに吹きかけられ、ぞくぞくとうなじの毛が逆立ってしまう。

「ワシは強制などせぬから、安心するがいい。だが、お前ももう幼い子どもではない。一人の女として、学ぶべきこともあるのではないか……？」

バロックの声はまるで呪文のようにリーネの耳から入りこんで、少女の理性を奪っていく。

と、バロックは不意にリーネから身体を離れた。

その体温、体臭が遠ざかったことにほうと息をつくとともに、リーネは胸がキュンと痛むのを感じた。

それが解放されたという安心感と共に、一抹の寂しさを伴っているということに、リー

ネは愕然とする。

(そんな……あたしは、ちが……)

呆然とするリーネには構わず、バロックは上衣を脱いで全裸になった。

そしていかにも高級そうな長毛の絨毯に仰向けに横たわると、ベアトリスを手招きしたのだ。ベアトリスはうっとり瞳を潤ませると、バロックの腰に跨って、愛おしそうに股間の肉棒に指を絡める。

「リーネさまのために、私せいいっぱい聖王さまとのまぐわいの素晴らしさをお見せいたしますわ」

しゅっしゅと手首のスナップを利かせ、そそり立つ陰茎をしごき立てると、またあの牡臭が立ち上ってリーネの鼻孔をくすぐる。

うっすらと汗をかいたベアトリスの白い肌からも、女の発情した体臭が漂ってきて、二人がまたあのいやらしい交接を始めるのだとわかった。

「ご覧になって、聖王さまのこの見事に勃起した聖ちんぽを。この太くて大きなものをおまんこでくわえこんだときの充実感と言ったら……ああ」

我慢できなくなったのか、ベアトリスは亀頭を口いっぱい頬張って、じゅるじゅる音を立て始める。

片手は自らの股間に潜り込ませ、濡れた音と共に、少女がたつぷりの蜜と精液で濡れた花卉をかき回すのが見なくてもわかった。

「リーネさま、これが女として生まれたものの、真の悦びですわ……っ」

膝を曲げ、大股を広げた美少女が、屹立した巨根の上に腰を下ろしていく。端正な顔が、挿入の一瞬だけ歪むが、すぐに喜悦のそれに代わる。

「ああ、入ってくる、はいつてきます。聖王さまのでかちゃんぽが、ベアトリスのおまんこにずぶずぶ……っ！」

咄嗟とつさに挿んだリーネの手を握りしめ、ベアトリスは戦慄いた。

貪欲に腰を前後に振り立てるその迫力に気圧されたリーネがハッと気付くと、バロツクが自分の股間を見上げにやにやしているのが見えた。

「リーネよ、お前もベアトリスのように股ぐらを弄りたいのではないか？ 遠慮しなくてもよい、ワシにそのさまを見せるがよい」

「ええ、そうですわリーネさま」

騎乗位で激しくまぐわう二人の言葉にフラフラ吸い寄せられるように、リーネはバロツクの顔を跨いだ。

ちようどベアトリスに尻を向ける格好になったのは、ベアトリスに顔を見られたくなか

つたからだ。恥ずかしいと思っっているはずなのに、リーネの指は自然と己の下腹部を這い、金色の陰毛の奥の花弁を弄り始めていた。

「あ……………あ、んうっ？」

これまで卑劣かつ淫らな敵の前で痴態を晒したことはある。だが、こんなふうに分で自分を慰めた経験はなかった。

それなのにリーネの指はごく自然にクリトリスを探り当て、肉壁を指先でなぞっていた。ほんの少し指の腹を膣口に差し入れただけで、熱い蜜が「ぬるり」と指先を濡らすのが分かった。

（ああ、あたしつたらこんな、こんな恥ずかしいことを…………）

しかもバロツクの顔を跨いでいるため、バロツクはリーネのその部分をもろに見上げているという体勢。恥ずかしくてバロツクの顔は見えないが、視線が突き刺さってくるようだ。

それなのに指が止まらない、止められない。それどころか花弁の奥から滲み出る愛液はどんどん量を増やしていき、太腿を伝い、手首にまで垂れ落ちてくる。

「むふふふ、生娘にしてはずいぶん濡れっぷりだなリーネ。さっきからいやらしい汁がワシの顔にばたばた滴ってきておるぞ」

「ひうつ」

背後からはベアトリスの嬌声きょうせいとにゆぐにゆぐと膣穴でペニスを擦る音。自分の股間からはぴちゃぴちゃ湿った音に、バロックの下卑た笑い。

(自分で弄ってるから……き、気持ちよく、なっちゃう……!)

誰だって自分の快感ポイントは自分で熟知している。バロックに見られていることがわかっていながら、リーネは夢中で股間を弄り続ける。こみ上げる快感に膝ががくがく震えてしまう。

「リーネさま、リーネさまもおまんこいいのですね。ああ私もまたイッてしまいそうっ」  
(こんなの嘘よ、こんな男に自分でするところを見られて気持ちよくなるなんてありえな、い……)

だが成熟した女体はしばしば己の意志を裏切るものだということを、リーネは思い知った。

ぬるりとした愛液をまぶしつけたクリトリスがひりひりと快感を訴え、花卉がうつすら開いていつでも指を受け入れようとしている。

自然と腰がくねり、いちばん快感の得られる部分を弄りやすい体勢になっていることに、リーネは愕然とした。

「こんなの、駄目、いや見ないで、見ないで、ああああ〜っ」

びくっ！　びく、びくっ……思いきり爪先立った体勢で、リーネは自身の指でアクメに達していた。

稲妻のような快感が頭のとつぺんまで突きぬけ、へなへなと腰から崩れ落ちるのを我慢できない。そしてしゃがみこんだ先にあるのは——もちろんバロツクのにやついた顔だ。「むぶふふふ、自分から股ぐらを押しつけてくるとは、存外堪え性のない娘だリーネ。いだろう、聖王の舌でその疼きを解消してやる」

言うが早いか、リーネの股間に口を押しつけたバロツクの舌が、猛烈な勢いでリーネの花弁をねぶり始める。

じゆるじゆると大きな音を立てられ、リーネは羞恥に頬が熱くなる。そんな反応を楽しむように、バロツクは尖らせた舌先を膣穴にねじり込んだり、クリトリスを吸引までしてくる。

「あ、ひいつ、そ、そこはダメっ」

「さすがのじゃじゃ馬も聖王のクンニの前では虚勢も張れぬか。ワシの前ではただの女になるのだ、リーネ。そして処女の蜜をもっと垂れ流すのだ」

思わず腰を浮かそうとしても、男の太い腕がリーネの太腿を抱え込んで、いつそう奥ま



で舌を差し入れてくる。

その手が徐々に上に伸びてくると、両手に収めた乳房を揉んだり、乳首を捏ねたりの三点責めに、リーネは金のツイントールを振り乱して悶えた。

「らめええ、そんなにされたら、あたしヘンになつ……ひやいつ？」

バロツクは悠然と腰を突き上げ、ベアトリスから喘ぎ声を引き出しつつ、リーネにクンニ攻めを続けた。

「はああんつ、バロツクさま、私ももう一度子種を、子種をつ」

(ベアトリス、なんて気持ちよさそうな声出すの……ううん、このままじゃあたしも……そんなの……)

リーネは懸命に脳裏にアレスの顔を思い浮かべようとするが、全身を包み込む男と女の淫らかな空気は、容赦なくリーネをただの女に変えていく。

(こんなんで気持ちよくなっちゃったら、いつか、あたしもベアトリスみたいに……！)

女の身体はこんなにも快樂に弱いものなのか。それとも聖王とは女にとってそれほど圧倒的な存在なのか。

リーネにはもう判断できず、ただ股間で蠢く舌の動きに身を委ねたいという気持ちだけが大きくなっていく。



「あ、ああ、ああ……！ あたし、もう、い、イク……ツツツ」  
いつか自分はバロックを受け入れ、この男の子を孕まされる。そんな予感の中、リーネは絶頂を迎えた……。

そして、いつしか若く健康な女体はその刺激に否応なく反応するようになっていたのだ。  
「うう……あつ、あはあうつ」

「カーラが……あのような真似を」

静まり返った砂漠の国に、「くちゅくちゅ」と湿った音と乙女の甘い吐息が響く。細い指がヴァギナをなぞり、敏感な肉芽に触れるだけで、細身の女体がぴくぴくと愉悅に震える。

「ん……んあつ、あ、あふううつ。はあ、はあ……んっ！」

それは、明らかに性的な快感を表す動き。トリスタン公国の王女は処女の証を守ったまま、自慰で悶える身体になってしまっていたのだ。

「ぐふふふ、生娘の我慢汁を味わうとするか」

「あつ」

マンズールの太い腕がカーラの右足を掴んで、軽々と持ち上げた。

反射的に股間を隠そうとする手を払いのけると、禿頭の悪漢は乙女の股ぐらに分厚い唇を押しつけ、じゅるじゅると音を立てて蜜液を啜りあげる。

「あひ、はひいいいいいっ」

唾液にまみれた舌が容赦なく花びらを押しわけ、処女穴に分け入ってくる。外見とは裏

腹に、マンズールは女をいたぶる技に長けていた。

膣穴の浅い部分を執拗になぞっていたかと思えば、クリトリスをくすぐり、吸い上げてくる。カーラ自身の意志とは無関係に、じんわり快感が広がっていくのが抑えられない。

いっそ獣に喰われるように乱暴にされたなら、マンズールへの憎しみで心を支えられるだろうに。少女はもどかしさにただ打ち震える。

「うっ、くふうう……っ、あぁっ！」

「んじゆるる、おうおう、男を知らぬ処女の蜜の芳しいことよ！ この砂漠の乾きも癒えるというもの」

そううそぶくマンズールの股間では、巨根が物欲しげに揺れている。もはやカーラ王女の純潔が風前の灯であることは明白。そしてそれを止められるものはこの場にはいない。

「絶望せよ、トリスタンの民よ、アイザック公よ！ 貴様たちは己の弱さゆえに我らヒツピアに屈するのだ！」

マンズールは勝利の余韻に浸りながら、少女の身体を人形のように扱い、背後から抱えあげた。M字開脚を強制されたカーラの股ぐらは、肉襷の皺一本までも晒され、ひくついている。

「い、いや……ゆるして……」

震える乙女の声を無視して、悪党は陰茎で肉裂をゆつくりとなぞる。

慌てる必要はなかった。既にカーラの秘裂は、肉茎が擦れるたびに淫らかな蜜を滴らせているのだから。

(こんな、おっきいの入りっこない。あたし壊されちゃう……ううん、これから犯されるって言うのに、どうしてあたしのお股はこんなに熱く火照っているの!?)

王女の意志と、肉体は完全に乖離していた。肉の身の弱さにカーラはほろほろと涙を流し、嗚咽する。

「悔しいか、アイザック公！ 己の妹が敵将に種付けされるのが！ 妹御の生涯ただ一度の破瓜の瞬間を、その目に焼きつけろ！」

(見ないで……お兄さま、みないで)

涙に濡れた目を上げると、グラハム城の兄は噛みしめた唇から血を流していた。妹姫を救う手だてがなにもないということを、彼は悟っている。

みしっ。

「？ —— ああああっ！」

瞬間、身体が二つに引き裂かれるような激痛が背筋を走り抜けた。巨根の先端が少女の愛らしい割れ目にめり込んだのだ。マンズールは敢えて焦ることなく、半分だけねじり込



んだ亀頭で小刻みに乙女の肉を揉みほぐす。

「くっ……い、いっそ殺してッ！ その汚らしいものであたしを串刺しにして命を奪いなさい……っ」

「健気なことよな、トリスタンの姫。だがお前の身体はこのマンズールさまのデカマラを既に受け入れているぞ」

ずん、ずん、ずしっ、ずしっ。マンズールが腕の力をわずかに緩めるだけで、少女の重みで肉槍がずぶずぶめり込んでいく。

恐ろしいほどの衝撃、引き裂かれる処女膜。拡張される膣肉……だがなによりおぞましいのは、何十回と強要された自慰行為の果てに、カーラの肉体が女として目覚め始めたこと。

「うっ、うぐ、うああああっ」

「くっくっ、いいまんこだ、マラに絡みついてくるようだぞ。そうれそれ、奥からスケベ汁がじくじく溢れてきおるわ」

悔しさに目を背けるが、下腹部が熱く火照っているのは事実。

マンズールの巨根は確かに負担ではあったが、破瓜の痛みは刻一刻とそのトーンを下げ、その代わりに乙女の秘肉はしなやかに肉の侵略者を受け止めている。

「お前は決して殺したりはせぬ、カーラ王女。なぜならお前はこのマンズールさまの子を孕むのだからな」

わかりきったことだったはずなのに、その言葉に目の前が真っ暗になる。

少女の幼腔を無遠慮に擦り立てる巨肉棒から迸る子種は、カーラの中で赤子となって結実する。自分は憎き侵略者の子を産まされるのだ。

(いやだ……それだけは、いやあ)

無垢なる乙女の願いととは裏腹に、マンズールの動きが少しずつ大きくなっていく。

最初は挿入するだけで身を裂かれるほどだった痛みも薄れ、破瓜の鮮血に混じって透明な乙女の愛液がマンズールの陰囊にまで垂れ落ちていく。

「むう、スケベ汁が止まらねえ……そんなに俺さまの子種が欲しいか、好き者王女？」

「だ、誰が……あひんっ」

精一杯の強がりも、激しい突き上げの前ではたちまち甘い声に変わってしまう。

「せっかくの初物だ、もつとじっくり楽しませてもらわねえとな！」

「いやああっ、そんな、動いちゃ……んくうう……っ」

神経がとろ火で焙られるように、理性は愉悅に代わり、カーラは完全にマンズールに身を委ねていた。半開きの唇から舌を突き出し、いつ果てるとも知れぬ陵辱に意識が遠のく。

「でも、お股はスケベなおつゆでぐしよ濡れなんじゃなくて？ 作り物とはいえ、これをぶち込まれたいとは思わないかしら」

「……………」

右手の指をディルドーの根元に絡めたまま、ピンクの髪の毛の少女はぷるぷると唇を噛みしめる。内腿には既に幾筋もの愛液が垂れていて、少女が欲情しているのは丸わかりだ。

「いいのよ……あたしだって今はバロック陛下に暇を出されている身だし、少しあなたの相手をしてあげても。さあ、欲しいものがあるなら、はつきりと口に出して御覧なさい。それにふさわしい格好でね」

戦場では敵に対して容赦のない剣を振るうリーネの攻撃性は、いまや同性の少女に対し、サディスティックに開花していた。

それを理解したうえで、ウエンディは身体の疼きを抑えることができないと悟るしかなかった。

恥辱と期待に胸躍らせながら、少女魔導士は唾液まみれのディルドーから唇を放すと、のろのろとベッドの上で後ろを向いた。

「ふふ……いい子ねウエンディ」

四つん這いで自らに尻を向けた少女を見てにんまりと微笑むと、リーネの小さく白い手



が優しくウエンディの骨盤を包み込んだ。

「ああ……」

思わず漏れたその声は諦念か、それとも待ち望んだものが与えられる悦びの声か。リーネは意外な力でウエンディの腰を抱き寄せると、ディルドーの茎部分で乙女の秘裂を乱暴に擦り立てる。

「あつ、そんな？ こ、こするだけじゃ……」

バロック相手にはしおらしく服従して見せるリーネだが、今は完全にウエンディの優位に立っていた。茎で大陰唇やクリトリスを擦るだけで、敢えて入れようとしなない。

ウエンディは懸命に腰をくねらせ、模造男根をくわえこもうとするが、運動神経はリーネの方がはるかに上、ただただ焦らされるしかない。

「いやあ……お、おちんちん欲しいですう、造り物でもなんでもいいです、おつきいおちんちん、ウエンディのおまんこに入れてくださいいい」

「そこまでお願いされたら仕方ないわね……っ」

くつと腰を引いたかと思うと、リーネは勢いよく腰を突き出した。しかし次の瞬間、ピク髪少女の目は見開かれ、舌を突き出すが声も出せない。

「あ……うあ……」

「あら、あなたこっちでも感じるんでしょう？ あたしのおまんこにもいい具合に刺激が伝わってくるわ。あなたも存分に楽しんで」

ぐ、ぐぐつと挿入が深まると、ウエンディは衝撃に顔を歪める。それもそのはず、リーネの腰に装着されたデイルドローは、ウエンディのアヌスを深々と貫いていたのだ。

多少は唾液や愛液のぬめりがあるとはいえ、久しく男と交わっていなかった少女の尻穴には大サイズのデイルドローは強烈過ぎる刺激だった。

「う、ぬぎい……いいいっ！」

「大丈夫よ、ウエンディ。裂けてる様子もないから。そのうちすぐにお尻の穴でもよがりたくなるわ」

もともと小柄なリーネは手足も細いが、鍛え上げたそれは猛烈なピストンを生みだすパワーを持っていた。

ぬぶちゅ、ぬぶちゅと人造男根が激しくアヌスを貫き、引き抜かれ、また押し込まれる。その衝撃はリーネ自身のクリトリスにも反映され、剣の国の女王は快美の笑みを浮かべる。

「うぐうう、あつ、あひ、はひい」

「だんだん可愛い声になってきたじゃない。殿方が女の尻を犯すのって、こういう気分なのね……」

ますます興に乗って腰を振り立てるリーネの姿を見届け、バロックは次の覗き部屋に向かう。

残るはシンシアとドロシー……炎の魔法を操る三つ編みの少女は、そのマナの高さとは裏腹に、のんびり屋で子どもっぽいところがある、らしい。

「さて双方おっとりしたタイプの娘だが、どうなっておるかおう」

ベアトリスとリーネが意外なほど大胆に魔導少女たちを責め立てているのを見て、バロックもすっかり興味をそそられている。

もともと各国の国民から敬愛されてきた女王たちである。それが今ではすっかり調教され、バロックに身も心も捧げる色狂いとなってしまった。

「ほう、なんとなんとこれは」

息を潜めてシンシアの部屋を覗き見たバロックの唇が歪み、下卑た笑みを浮かべる。

それもそのはず、神聖魔法で名高いアウラ神国の女王の目の前で、三つ編みの魔導士はなんともみつともない格好を強いられていたのだ。

「ううう、シ、シンシアさま……ドロシー、この格好は恥ずかしいですう」

頬を赤らめる少女の両下肢は高々と上げられ、背中を丸めて臀部でんぶを天高く突き上げていた……いわゆる「まんぐり返し」というポーズだ。

しかもドロシーの膣穴には既に太めのデイルドーが深々と突き刺さり、透明な汁を垂れ流している。シンシアはそんなドロシーの痴態に目を輝かせながら、さらなる責め苦を少女に課そうとしていた。

「もう少しおとなしくしていてね、ドロシーちゃん。前にマリオンちゃんも怖い男の人たちにここを弄られていたんだけど、女の子はここでも気持ちよくなれるそうなんだよ」

「ひっ、ひいひい〜ん」

なんと片手でドロシーの下肢を抑えつつ、シンシアは残る手に細身のデイルドーをもう一本持ち、その先端で少女の裏門をくりくり弄っていたのだ。

「あああつ、シンシアさま、そこ弄られるの久しぶりで、か、感じちゃいそうですう」  
ドロシーはウエンディと共にオーウエンやその部下たちにさんざん陵辱され、膣穴でも尻でも口でも快感を感じるように開発されている。

ましてやいまのドロシーはバロックに犯されることもなく、その若い肢体は欲求不満を抱えていた。シンシアが細デイルドーをずぶりとアヌスに刺し込むと、子猫のように甘い声で悶え始める。

「きゃふうう、あふううんっ。お、おまんこにもお尻にも硬いの入って、どっちも気持ちいい〜っ」



「まあ、ドロシーちゃんのような可愛らしい娘が、こんなはしたないことをされてよがっているなんて、私どきどきしてきちゃう」

ずぶりずぶりと前後の穴を交互にえぐるたび、ドロシーの下肢がびくびくと跳ね上がり、少女はあっけなく最初のアクメに達する。

だがもちろんその程度でシンシアが満足するはずもなく、聖巫女は期待と興奮に目を輝かせながら、いつそう激しくドロシーの淫穴を責め立てる。

じゅぷ、じゅぷ、ぐちゅちゅつ、濡れた音にあどけない少女の嬌声が重なって、なんとも言えぬ淫惑の空間にバロックの目も引きつけられる。

「シ、シンシアさまあ。あたし最初はエッチなことすごく恥ずかしくて、お尻も痛いだけだったけど……いまは、今は違うんです」

「ふふ、どう違うの？」

「これが、これがあたしが本当に欲しかったものなんです！ だからもつとドロシーのおまんこケツ穴ぐちゅぐちゅにしてくらさいいっつ」

デイルドーを握るシンシアの動きが早くなるのを見届けると、バロックは満足げに覗き窓から離れた。

「ふふ、あの魔導士娘どももなかなか見せおる。それにお前に提案した黄金の騎士団……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

偶数月の  
17日に発売!

業界唯一のアダルトノベル雑誌!

cover illustration by  
おにぎりくん  
(ALICESOFT)

# トリーム 二次元マガジン

2D DREAM MAGAZINE

魔剣士リーネ2 好評連載中!

©ALICESOFT



魔剣士

# シネ

Leane of Evil Blade

原作: まくらカバースoft

小説: 空蟬

挿絵: 桐島サトシ

独特のシステムで好評を博した  
大ヒット同人ゲームが  
衝撃のノベルサイズ!!



全国書店、各電子書籍サイトにて  
**好評発売中!**